

---

# アンリアル

夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンリアル

### 【Zコード】

N7249Y

### 【作者名】

夜

### 【あらすじ】

「お前を殺す」 本物の殺し文句と死の接吻、彼女はタ立のよ  
うに現れた。

暗殺者の少女レインと高校生リオは出会い、奇妙な関係が始まり…

サイト『DiS Pater』でも掲載中です。

退屈だ。毎日、毎日、そう思つてゐる。気が付けば俺は今日も決まつたスケジュールを消化している。その繰り返しから抜け出そうとして足搔いても、結局、何も変わらない。虚しいだけだ。

たつみりあ  
異理央、それが俺の名前。正直、俺はこの名前が好きじゃない。女の名前だからとそんなんじゃない。大きくなるにつれて漠然と胸の奥にあつたものが溢れ出してきた。けれど、それを爆発させるほど子供でもない。そうしてはいけないとわかつてゐる。あの人を深く傷付けてしまうから。

「ねえ、リオ。何を考えてるの？」

俺の腕を引いて、上目使いに彼女は問う。

名前はもう忘れた。大して意味もないから。どうせ、今日限りの付き合いで呼ぶこともない。

マスカラを塗りたくった睫、大きく見せようとした目は綺麗じゃなかつた。一体、この汚い化粧に、彼女は何時間かけてるんだろう。みんなと同じ化粧をすることにどれだけの意味があるんだろう。

「あんたが退屈な女だつてことかな？」

取り繕う気にもなれず、俺は適当なことを言つた。自分のことばかり話して、俺に取り入ろうとしてるのがよくわかる。胸焼けのするような香水の匂い、やっぱり今日は無理。

「サイテー！」

勝手に掴んでいた腕を放して、鞄を彼女は振り回す。

「サイテーなのはあんたもだろ？」

言えば、彼女はぴたりと止まる。どうせ、顔とか金とか、遊びたいだけ。わかりきつてゐる。行き先、だつて聞くまでもなく決まりきていた。甘くとろけるデートなんて必要としていない。刺激が欲しいだけ。

「あんた、何様！？」

浴びせられる罵声にも俺の冷めた心は痛まない。“俺様”だって言われることにも慣れた。実際、その通りだ。俺は不自由を知らないし、何でも思い通りになってきた。

「わかりきつてることを今更責め立てるのはあんたが醜いからじやねえの？」

俺をサイテーな男だつてわかつて彼女は近付いて来た。だから、俺を責める資格なんて彼女にはない。

「あんたなんか……！ 地獄へ落ちろー！」

陳腐な台詞を吐き捨て、彼女は走り去る。俺はただその背が遠ざかるのを見ていた。サイテーなのはわかつて。まだ高一なのに、俺はこれから先どうなるんだろう。先が見えなくて、ただただ足搔いてる。異の名前も理の字も央の字も何もかもが俺には重い。重すがる。

「冴えない言葉だつたな」

まるで俺の心を読んだかのようにその声は響いた。

人通りの少ない道、誰も俺たちのことなんか気にしてないと思つてたのに、彼女は突然俺の前に現れた。

一言で言えば美少女、多分同じ年ぐらい。艶やかで真っ直ぐな黒髪、大きな瞳、ジーンズにミリタリーなジャケットなんてボーイッシュな格好ながら、可憐という言葉が似合う華奢な女だった。

だから、俺は声が聞き間違いだつたと思おうとした。それは綺麗な声だつたけれど、あまりに淡々としていたから。

「私ならもつと刺激的な言葉を吐いてやるのに」

今度ははつきりとわかる。その唇が動いたのが見えた。確かに。彼女がその言葉を吐いている。彼女は一体何を言つている？

「退屈なんだろ？ リオ・タツミ」

ゆっくりと彼女が近付いてくる。俺は動けなくなる。

彼女は何で俺の名前を知つているのか、そんなことはまともに考

えられなかつた。

彼女は俺をじっと見つめた。そして、ニッコリと微笑む。

前に会つたことがあつたか？　いや、こんな美少女を忘れられるはずがない。

或いは、俺が相手にしなかつた女が全身整形で復讐しに来たとか？　いいや、そんな馬鹿なことがあるものか。これは現実の世界なんだ。ドラマじゃない。劇的なことは何一つ起こるはずがない。

彼女の顔が目の前に来る。人形のような整つた顔、俺は魔法にもかかつたかのように動けなくなる。

頬に触れた冷たい手、触れる唇、ほのかな髪の香り……キスを、されている。

なぜ、こんなことになつているのかわからない。けれど、このままもつと深く……そう思った時に唇は離れた。

初めてキスをした時だつてこんなに思いにはならなかつた。馬鹿みたいに俺は放心していた。

そのキスの真意を確かめたくて、ぼんやりしたまま、もう一度彼女の顔を見た俺は凍り付くしかなかつた。

鋭い瞳、冷たい表情、それはまるで氷の仮面だつた。そして、彼女は酷薄に笑つた。いや、仮面だつたとすれば、それはさきほどどの笑みの方だつたのかもしぬれない。

「お前を殺す」

低く囁かれる声、それは愛の言葉なんかじやない。甘美な響きはあるでない。毒だと本能が告げている気がした。

そのまま、彼女は隣を擦り抜けて去つていくのに、動けないまま震えていた。

それは、單なる捨て台詞じやなくて、本物の殺し文句だつたのかもしれない。あれが愛のないキスだつたと気付いたのは、随分後のことだつた。

何て格好悪いんだ。

次の日になつても、俺の気持ちは全く晴れなかつた。むしろ、余計に曇つていつた。もやもやしたものが胸の内に渦巻いてる。まるで、悪い夢を見た後のよつて。いや、きっとあれは悪い夢だつた。きっとそうだ。

昨日と大して変わらない今日を何とかやり過ごした俺は、昨日のこともあって放課後は遊ぶ氣にもなれずに、珍しく真っ直ぐに家へと帰つた。

一人暮らしのマンション、こつものよつて何も考えずに寝室へ行く。鞄を放り投げようとして俺はようやく異変に気付いた。

「おかえり、早かつたじやないか。今日は遊んでこなかつたのか？」  
彼女はベッドの上でニコリと笑つた。昨日と同じよつて、綺麗すぎる顔で。まるで家族のような口振りで。

「な、何でお前が……！？」

俺は混乱する。これも悪い夢、その続きなのか。

どうやって、この女はここへ入り込んだ？ ビラして、俺は気付けなかつた？

「このベッドで何人の女を抱いたんだ？」

「抱いてねえよ」

彼女は俺の質問には答えずに質問で返してきた。思わず、答えてしまう俺もどうかしてると思うけど、男の部屋に上がり込んでベッドに座り込んで、そんなことを問う美女もどうかしてる。

「家には連れ込まない趣味か。なら、悪いことをしたな」

「心にもねえことを言つんじやねえ」

彼女は思つてもいなことを平氣で言つ。今まで相手にしてきた女だつてそうだつた。だけど、彼女の場合、うんざりするような不快感はなかつた。尤も、それは怒りを感じないつてことじやない。

「随分ご立腹じやないか」

「怒るに決まつてゐだろー？」

彼女は平然と言つ。この状況で怒りすら感じじやないのか。そ

そもそも、彼女はわけのわからないことばかりだ。不法侵入に不遜な態度、そして、昨日のキスと殺し文句。

「何だ、童貞か？」

「そういうことを言ってんじゃねえ！」

彼女は笑うけど、俺は全く笑えない。笑えるものか。それに、断じて童貞じゃない。そんなものとっくに脱してる。でなきや、不健全な付き合いなんてしてない。

「わかつているさ、お前が振られた昨日の女のことだつて私は知ってる。趣味はいいとは思わないが」

「ふざけんじやねえ！ つーか、テメエは一体何者なんだよ！？」

「私は私だ」

「答えになつてねえ！」

どこまでも可憐で、女を感じさせる見た目に反して、全く女らしくない口調が尚更俺を混乱させていく。彼女が普通じゃないことだけはわかる。けれど、その正体はどこにも行きつかない。俺の理解できる域を完全に超えてる。

「あまり怒るな。うつかり殺してしまいそうだ」

「そうだ、それだよ！」

忘れてたけど、彼女は昨日俺を殺すと言った女だ。あの殺し文句だけは本物だったと思う。

「だから、何で上から目線なんだ！？」

「まあ、落ち着け。私も鬼ではないから、話し合ひには応じてやる

「愚問だな。私がお前の命を握っているからに決まつているだろ？」

「テメエは一体何者なんだつて聞いてるだろ！？」

俺の気も知らないで、彼女は悠々としていた。何せ、突然現れて、キスして、殺すとか言う女だ。まともじやないのはわかるけど、俺はそんなんに暢気な性分じやない。

「わからないか？」

「わかるわけねえだろ！」

彼女はじっとその大きな目で俺を見るけど、わかつてたら、こん

なに頭の血管が切れそうなほど叫んだりしない。

「現時点でお前を殺す気はない。適当に説明してやるから落ち着け」「テメーはさつきから何様のつもりなんだ！ 目的は金か…？」

「ガキの小遣いなどいるものか」

わざとらしく溜め息を吐いて彼女は言つけれど、落ち着けたら苦労はしない。わからなくて、どうしようもなくイラライラする。はつきりしないことは大嫌いだ。

「整形して出てこられたってわかるねえんだよ！」

「整形？ 何の話だ？」

俺は思わず叫んだ。叫んでしまった。その瞬間、彼女の眉間に皺が寄る。いかにも、予想外つて顔で俺の方がビッククリしたくらいだ。

「お前……俺に恨みとかあるんじゃねえのかよ？」

何となく恐る恐る俺は問う。本当に彼女がわからない。今まで会つたことのないような人種だった。

「私にとつてお前など無でしかない。ぐだらない妄想だ」

「ひどい言い方をするな」

彼女ははつきり言い切つた。俺だってここにいる、一人つきりなのに、その目に俺を映しておきながら、全く見えていいかのように。

「さつきの答えた。私は暗殺者……と言えば聞こえはいいが、ただの入殺しだ」

彼女はさらりと答える。だけど、俺はその言葉が冗談だとは思わなかつた。そう言つた彼女の目に偽りなんてなかつた。その目だけで殺せると言つていいかのようでもあつた。

「じゃあ……親父、かよ？」

急に力が抜けた俺は床に座り込んで問う。そして、彼女の唇の端が吊りあがる。肯定、つてことか。

「言つとくけどな、親父は俺のために絶対に動かねえよ」

彼女が親父への脅しのために俺に近付いたとしても、親父は多分動じない。でなきや、あんな仕事やってないと俺は思う。そう親父

の異央は政治家だ。

それに親父にはもう一人、将来有望どころか、既に出来の良さをまざまざと見せつけてる息子がいる。俺の十も年上の兄貴央理も既に政治家だ。

「少しさは頭も使うんだな」

「それしか考えられねえだら」

感心したように彼女は言うけど、流石に俺を殺すためにわざわざ暗殺者を雇う奴もいないだろ。恨みの対象が俺でなければ話は簡単だつた。

「整形女の復讐劇を考えてたくせに」

「普通、暗殺者がやってくるとは思わねえだろ。ドラマじゃあるまいし」

「それほどお前はひどいことを女にしてきたのか？ 殺されても不思議じやないようなことを？」

「だつて……親父は、親父だ。それに、人質に取られても何の弱みにもならない俺が、そのせいで暗殺者に付き纏われるなんて、まずありえねえ」

彼女は言つ。だけど、彼女に俺の気持ちがわかるはずもない。俺にだつて色々ある。俺との遊びに本気になるような馬鹿な女が何を考えるかも彼女にはわからない。そして、俺が親父をどんな気持ちで見てきたかも。

「随分、落ち着いたじやないか」

「わかんねえよ。現実味がなさすぎてどつか麻痺したのかも」

言われて、俺はイライラが収まつたのに気付いた。結局、全部、彼女が正体不明のせいだった。彼女が暗殺者だつてわかつても、驚くとか、怖がるとか、そんな気には全然なれなかつた。だから、彼女は普通じやないのかつて納得したぐらいだ。

「さて、はつきりしたところで今日の夕食は何だ？」

「今日は……つて、何でだよ？」

彼女の問いに俺は普通に答えそつになつて、氣付いた。なぜ、彼

女がそんなことを気にするんだ？

「今日からここに住むからな」

「は？」

「お前を監視するために私はここで暮らす。お前に拒否権はないが、寝るのはソファード我慢してやるから安心しり」

「ふ、ふざけんじやねえ！」

俺は多分凄く間抜けな顔をしていたんだと思つ。彼女はいかにも面倒臭そうに説明してくれたけど、「はい、そつですか」はありえない。

「どうせ、女は連れ込まないんだろ？ 困ることなどあるものか」

「どうして、人殺しと一緒に住まなきゃいけねえんだよ！」

「言つたはずだ。お前に拒否権はない。私が決めることだ」

彼女は俺の気持ちなんて全く無視だつた。困ること？ そんなの大有りに決まつて。何で、この俺が、いくら暗殺者だからって、女の言いなりにならなきやいけないんだ！

「私はレイン」

不意に彼女が言つた。

「レイン、それが私の名前だ。よろしく、リオ」

「レイン？ 変わった名前だな。そりやあ、純日本人なのにオリビアとかライアンってヤツとかいるから不思議でもねえけどな……あ、コードネームか？」

てっきり純日本風の名前が来ると想つていた俺はちょっと呆気に取られた。

「レイン……雨、なんて呑み物つな、呑わないような。正直、俺のリオなんて女の名前みたいだし、日本っぽいかつて言つと微妙な気もするけど。

「雨の日に拾われた。だから、レイン。それだけのことだ」

「単純だな」

「そんなものや」

淡々と言つたレインになぜか俺の方が寂しくなつた。俺にとって親

は当然の存在だけど、誰しもがそうではない。一般的の家庭に生まれた平和な子供が暗殺者になるとも思えない。

「つー、よひしへじやねえよ！」

「歩も一歩も三歩も遅れて気付いた。誰が暗殺者とよひしへできるか！ 騙されるな、俺。

「よし、今晚はピザだな」

「勝手に決めるな！」

「一体、何がよしなんだ。そして、何でピザなんだ。彼女がどこからともなく取り出したのは多分俺が電話台に置いてたピザ屋のチラシ、たまにダチが遊びに来た時ぐらいにしか頼まないけど。

「つーか、暗殺者のくせにピザなんか食べたいのかよ……まあ、たまにはいいか」

レインはわけわかんないけど、最近は食べてなかつたと思うと食べたくなる。

そうして、俺と美少女暗殺者の奇妙な生活は始まつてしまつたのだった。

それから数日、レインはすっかり俺の生活の一部になってしまった。当たり前みたいに彼女との朝が始まり、夜が終わり、また朝が来る。

特に身の危険を感じることもなく、どちらかと言えば護衛のよくな気がしている。歳も近い彼女との生活は妙に楽しかった。

ただし、俺が学校に行っている間、レインが何をしているのかはよくわからない。学校に潜入してくるわけでもなく、俺の漫画を読んだりDVDを見たりCDを聴いたりして過ごしているらしいが、それが全てじゃないことはわかってる。

レインには仲間がいるのだろうか。上司がいるのだろうか。依頼主とは会っているのだろうか。依頼主は一体誰なんだろうか。

疑問はそれこそ雨のように降り注いでくるけど、彼女にぶつけら

れそうになかった。きっと、もうとっくに後戻りできない状態になつてゐるのに、聞いたら袋小路に追い込まれる気がしていった。

だから、仕事のことは絶対に興味本位では聞かないことにしていた。

けれど、そんな俺の疑問の一つは勝手に答えがやつてきた。

ある日、俺はレインと街に出でいた。休みの日に家でダラダラしてても退屈で、外でフラフラした方がましだと思ったら、レインもついてきた。だから、一人でファーストフードを食べたり、服を見たりしてみた。レインはポテトが時間が経つと急速に不味くなることに文句を言つていた。けれど、そんなことが楽しかった。

そして、思ったことが一つある。絶対に口に出しては言えないけど、レインは案外可愛い。見た目じゃなくて中身が。きつい性格をしてるとは思うけど、それだけじゃない何かがある。それは、もしかしたら、“人間らしさ”というものなのかもしれない。

次はどこに行こうかなんて言つてたら、不意にレインが立ち止まり、振り返った。

「レイン」

呼びかけるその声に俺も振り返った。そこに立っていたのは若い男だった。

多分、俺よりもちょっとだけ年上、背が高くて、引きしまった肉体に、日本人離れした顔立ちをしている。金に染めた髪、まるでライオンのような風格の男だった。

「レオ、そっちの仕事はいいのか？」

「ああ、問題ねえよ」

レインが問い合わせれば、レオはぶっきらぼうに答えた。

「レイン、こいつは？」

「私のパートナーのレオだ。拾われた時、人食いライオンみたいだつたから、レオだそうだ」

「やつぱり、アレなんだよな？」

「ああ、アレだ」

何となく想像はついていたけど、俺は一応聞いてみた。レインのパートナー、つまり、このレオもレインの仲間、暗殺者だつてことだ。

「まあ、お前ならターゲットに情を移すこともねえか」

レオの言葉は俺の胸に突き刺さつた。今まで吐きかけられたどんな言葉よりも。いや、一番田だ。その冷たい眼差しもあの人には及ばない。あの人は暗殺者じゃないけど。

「またすぐに一緒にいられるようになるな」

多分、レオはレインが好きなんだ。そう思った。レインは「女々しいことを言うな」なんて言つたけど、俺は彼女にとつてターゲットの息子に過ぎない。

俺が、どんなにレインを可愛いと思つたって、その毒舌が心地よいと思つたつて、もう一度キスをしたいと思つたつて、今度は俺からしたいと思つたつて、ずっと一緒にいたいと思つたつて、レインは簡単に俺を殺せる。俺の心も体も打ち砕ける。俺が女をあしらつてきたように。

だつて、彼女がくれたあの冷たいキスは死の口付けだつたのだから。

レオに会つてから俺の心はすっかり冷めていった。多分、俺は浮かれていたんだ。レインは俺に「殺す」と言って死の口付けを送った。俺がどんなにレインを好きになつても彼女が俺を好きになることはありえない。

今日は何となく帰り辛くて、大して絆のない友達と遊んで遅くなつた。だけど、何も面白くなかった。思い浮かぶのはレインのことばかりだった。

「遅かつたな」

帰るとレインはベッドを占領していた。その周囲には漫画が散乱している。

食べて帰るつて連絡したから、レインは勝手にカツフーラーメンを食べたらしかつた。

そうしていると、レインは本当に普通の女の子みたいだつた。俺に負けず劣らず無為な生活をしているような気がして、滑稽だ。

彼女は暗殺者なのに。そう、人殺しの犯罪者、許されない存在なのに、人間臭い。

ベッドに近付くと、レインはゴロロンと転がつて俺を見上げる。髪がはらりと落ちて、耳が見えた。そこには銀色のドクロがいた。小降りだけど、とても女の子が付けるピアスじゃないと思つた。

「随分ごついピアスしてるんだな」

「ああ、あいつと同じだからな」

「レオと?」

可憐な見た目に反してハードなレインなら不思議ではないと思つたけど、聞かなきや良かったと思つた。

何となく手を伸ばして見たけど、ピアスは左耳にしかなかつた。

「何か同じものを持つていたいと言つから片方だけ貰つんだ。女々しい奴だろ？」

レインは笑うけど、俺は笑えなかつた。

レオはレインが好き。だから、たさやかで、確かな主張をするんだ。

今、レインの側にいるのは俺、でも、あいつにとつて俺は障害じゃない。やがて、死んでいくターゲット。本当にそれだけだ。だから、俺はレオにはなれない。

レインは起き上がる。艶やかな髪の毛はぐしゃぐしゃだつた。

「楽しんできたのか？」

「まあ、な」

レインは問うけれど、本当のことは言えなかつた。曖昧な言葉で「まかしても、レインはそれ以上聞かないとわかつていた。

「楽しめる内に楽しんでおけ」

その言葉は重くのしかかつた。だって、裏があるから。

「その内、楽しめなくなるから?」

聞かない方が良いのかもしれない。けど、俺は聞いてしまつた。

悔しくて、悲しくて、苦しかつた。

「そういうことになるな」

歯切れの悪い答えに一体どんな意味があるのかわからなかつた。

結局、また時は過ぎて行く。何も変わらなくて、それが不安になる。

いつまでこんな日々が続くのか。

いつまでレインと一緒にいられるのか。

いつまで俺は生きていられるのか。

母さんから連絡があつてまた不安になる。一応、心配してくれて

いるらしく、たまに連絡を取るけれど、特に変わった様子もないようだつた。でも、たとえ、女の子と同棲していると言つたとしても母さんは驚かない気がした。言えるはずもないけれど。

「親父に脅しをかけているつもりなのか?」

「そうかもしれない」

母さんとの電話が終わつた後、俺は何となくレインに問いかけてみたけれど、返ってきた答えはあまりに曖昧だつた。

「おびき寄せられるとでも思つてゐるのか?」

「どうだかな」

「わけわかんねえ」

ターゲットが親父だとして、最早親父は俺に興味なんてない。俺の側にいたつて何にもならない。

「なあ、いつまで一緒にいられるんだ?」

何となく問いかけてしまつた。我ながら馬鹿な質問だつたと思う。自分を殺すと言つている相手と一緒にいたいだなんて、あまりに滑稽だ。

けれど、レインといふと落ち着く。それは事実だ。

「何だ、私に惚れたか?」

レインは笑つた。でも、笑い事じゃない。まつたく、笑える話じやないのが現実。

「そうだと言つたら?」「?

はつきりとは言わずにほのめかしてみた。俺がレインを試すなんて、それもまた変だと思つたけれど、何だか悔しかつた。俺だけが振り回されている。

「おおよそ恋というのは勘違いだ。眞実の愛があるとして、それを見付けられる可能性は限りなく低い。誰もが巡り合えるのならば、この世は平和だ。そう反吐が出るほど平和な世界になつてしまつさ」歳は俺と大して変わらないくせに、愛だ恋だと語るレインは哲学

者にでもなつたつもりか。

「暗殺者も存在しない？」

「そう、きっと、私という哀れな存在も生まれないさ」

平和じやないからレインは存在する。だけど、哀れと言われても、俺にはレインがどんな人生を送ってきたかなんてわからない。

「雨の日に拾われて安直な名前付けられたりも？」

「本当に愛されて生まれてくるのなら、ないだらうな。眞実の愛は永遠らしいからな」

拾われたということは、捨てられていたということ。本当の名前もきっとわからないのだろう。

「俺を殺したら、どこに行くんだ？」

聞いたつて意味のないことなのかもしれない。死んだら、俺は聞くことも、見ることもできないから。

「わからない。私達はどこへでも行く

“私達”　　レインの仲間のことばわからない。でも、間違いなくそこにはレオが含まれている。

レオはレインとずっと一緒にいられるに違いない。だって、レインはパートナーって言つたから。レインにその存在を認められるから。

「いつになつたら、俺を殺すんだ？」

ついに核心に触れてしまった。多分、それは一番聞いてはいけないこと。

「自分の残り時間が知りたいのか？」

「違う。レインといられる残り時間だ」

レインは笑つたが、俺は本気だった。知つてしまえば、少しほ後悔なく今の時間を生きられる気がした。

けれど、レインは声をあげて笑つた。

「馬鹿な男だな。私といったって何もいいことなんてない。私が消えればお前は清々する。今までのことは全て夢だと思つて、いざれ忘れる」

レインの言葉は淡々としていた。でも、レインはわかっていない。  
俺の気持ちをわかつていない。

「いやだ、離れたくない！」

まるで子供だ。自分でもそう思う。それでも、レインの側にいたら  
れるなら俺は子供のままでいいなんて思った。

レインは固まつたように見えた。急に無表情になつて俺は怖くな  
つた。

だけど、急に頭を抱えるように自分の髪をぐしゃっと掴んで、表  
情を歪めた。

「……まったくな、こんなのは初めてだ」

俺にはレインが迷つたように見えた。あるいは、そう思いたいだ  
けなのかもしれないけれど。

「今まで何人もの要人暗殺に関わってきた。だが、今回のようなケ  
ースは何もかもが初めてだ。私も戸惑っている」  
やがてゆっくりとレインは語り出した。けど、半分は本当に、半  
分は嘘のような気がした。

「そろは見えない。俺だけが一人で馬鹿みたいに振り回されてる」  
俺が言うと、レインはニヤリと笑つた。

「私はプロだからな」

「そんなのずるい」

いつだって、レインの感情は俺には見えない。きっと、俺の感情  
はレインには筒抜けなのにフェアじゃない。暗殺者に公平さを求める  
なんてどうかしてるとかもしれないけど。

「お前はとても面白い男だな、リオ。初めてだよ」

田を細めて、レインが笑つた。それはレオとは違うと言われてい  
るような気がして少しだけ誇らしく感じられた。だって、レオは“  
普通の男の子”じゃない。

「お前は俺を退屈させないよ。いい意味でも悪い意味でも」

初めて会つた時レインは俺に問いかけた。「退屈なんだろ？ リ

オ・タシミ」と。そして、レインは本当に刺激的だ。

「安心しり お前は私がいる。必ずだ」

レインが急に真剣な顔で言った。だけど、それは俺を混乱させる。意味がわからない。守る？ 俺は聞き間違えたのか？

「それって、どういう意味だ？」

「お前は何も気にしなくていい」

問い合わせたところで、レインは答えてくれなかつた。

「だつて、俺を殺すんだろ？」

「知らないでいいんだ。いや、知るべきではない。あるいは、知つてほしくないのかもしれない」

そうレインは「お前を殺す」と言った。なのに、何で今更守るなんて言うのか。何で、当事者の俺を部外者にしようとするのか。

「お前の側についてやるひことだ。素直に喜べ。いや、泣いて歓喜しろ」

からかわれているのか。

今日のレインは何か変だ。そう思つたけど、それ以上は何も聞けなかつた。

レインに真相を聞く「ひとつしてはほぐらかされ、日々もやもやが増えていく。

こんな状態で一緒にいたいわけじゃない。だからと書いて、このままレインがいなくなるのは嫌で、俺はただ耐えるしかなかつた。そんなある日、また母さんから電話がかかってきた。父さんに何かあつたのかなんておもつたけど、『もしもし? 理央?』という母さんの声はいつもと全く変わらなかつた。

「何? 母さん。この前、話したばかりだろ?」

もつと愛想良くした方がいいのかもしれない。でも、俺にはこれが精一杯だつた。だつて、母さんに話すことなんて何もない。

『パパがたまには帰つてこいつて言つて』

「別に家出してるわけじゃないし、ちゃんと連絡とつてるだろ?」

『だからよ、あなたは私達の息子だもの』

わけがわからない。別に親と喧嘩してるわけじゃないし、親父がそんなことを言うなんて今までになかった。「好きにしろ」ってそれだけ、色々取り決めをしたけど、別に逆らつようなことはしない。大体、その取り決めは俺が親父に対して決めたことだ。「必要以上に干渉するな」とのこと。

「なら、正月にでも顔出すよ」

面倒臭い。先の話でもしておけば、それでいいだろ?って思った。

『今度のお休みに会いたいって』

「何だよ、急に」

急すぎる。自分の死期でも知ってしまったのかと俺は思った。でも、そんなことは母さんには言えない。

『それでね、パパが友達を連れておいでのつて言つていろのよ』

「友達?」

母さんは俺の疑問なんて無視して話を進めた。友達って誰だ。一体、何を考えているのか全然わからない。

電話の向こう親父が何かを言つていていた。

『そう、最近一緒にいる子? 女の子なの? 長い黒髪の』

その言葉に俺は心臓が跳ねるのを感じた。電話で良かつた。多分、母さんには俺の動揺は伝わっていない。

『何で親父が知ってるんだよ? 監視は付けないって約束だろ?』

たとえ、離れていても監視はしないこと。それが親父と俺の約束だったのに、何で親父が知っているのか。

『お付き合いしている子がいるなら教えてくれればいいのに』

「友達だつて!」

『あら、ムキにならなくてもいいのに』

母さんは凄くのんびりとした様子で言つ。別に長い黒髪の女と同棲していたつて、付き合つてるわけじゃない。相手は暗殺者、俺の命を狙つていてははずだつた。

「あのや、あ、兄貴は？」

家に帰るのは仕方がないとして、一つだけ心配なことがあった。本当に親父の自分の死期を悟つて、家族を勢揃いさせてしまうことだ。いや、別にもうボケたじーさんとかばあさんとかは結婚だ何だと騒ぎ立てたところで、問題じゃないけど、兄貴だけは困る。あとと、兄貴も嫌がる。

『央理は忙しこのよ』

「そう……」

ほつとしたなんて母さんは言えない。でも、本当にほつとした。母さんに俺の気持ちはわからない。わからなくていい。

『じゃあ、御馳走作って待つているからね』

母さんの声はいかにも楽しみにしていると、いつに弾んでいた。俺の心が重くなるのも知らずに。

レインに話すのも正直気乗りがしなかつた。でも、レインは俺の話した内容で何となくわかつてゐる気がした。

「あのや、親父がお前を連れて遊びにこにって言つているんだ」「疑問は残るけど、言つしかなかつた。隠すことはできない。

「いいだろう。行こう!」

レインは快く、本当に気持ち悪いほどあつさつと返事をした。そして、俺はほつとした。

「お前、チャンスとか思つてないよな?」

親父と会うことにはレインにとって好機のはずだ。でも、俺にとっては多分最悪の事態。

「母さんの前では殺すなよ」

無駄だとはわかつてたけど、一応、言つてみた。

たとえ、親父の暗殺が避けられない結末でも、母さんにだけは傷付いてほしくない。

「死ぬ時は皆一緒に知れないだろ?」

「一家心中か?」

レインが悪役っぽく一ヤリと笑つた。だから、俺も同じように笑つてみた。だつて、レインは約束したから、俺を殺さない。

「異央理がいないのが、残念だがな」

一家心中には役者が足りない。だけど、兄貴がいるなら、俺は必要ない。どちらか一人でいいのが俺達、いいや、本当は兄貴だけでも良い。俺がいなければ全て上手くいったはずだから。

心変わりの電話を待つてみても、雨乞いしたりしてみても、無駄だつた。予定に変更なし。

そして、約束の日はすぐに来てしまつたわけだ。

レインは「かの有名な異央に会うのに小汚い格好はできないだろう」とか言って俺に服を買わせやがつた。どうせ、高い報酬貰つてるくせに。「たまには貢げ」とか言いやがつた。

そんなわけで、今、俺の横にはピンクのワンピースを着たいかも母さん好みのほんわりした清楚な美少女がいるわけだ。すっげー複雑な気分。

「よく来てくれたね。理央の父の央だ」

何を考えているかわからない親父が後援者向けの笑顔を見せた。俺の嫌いな笑顔、でも、仕方ない。

「母の理子です」

「真田レインです」

母さんはここにこ笑顔でレインを迎えた。そうしたら、レインも恐ろしいほどに可憐な笑みを見せた。

そう言えばそうだつた。この女、ごついピアスが見えなくて、ミリタリーでボーキッシュな格好じやなければ本当に暗殺者だつていふのが信じられないぐらい普通の美少女だつた。

つて言つた、真田つて何だ。名字があつたなんて聞いていない。いや、待て、こいつは昨日戦国物のゲームをやつてなかつたか？まさか、真田幸村の真田？

「可愛らじこお嬢さんじゃないの。こつからお付き合にしていたの？」

母さんはマイペース。凶悪なくじこマイペース。お花畠のよひだな我が道を行つてゐる。

これにはレインもすみと困つてた。

「だから、違うって！」

「リオは本当に照れ屋さんで……でも、いい子なのよ」

俺の否定も空しく、母さんは「この手を離さないー」的にレインの手を両手でがっちりと掴んでいた。

でも、レインの手は人殺しの手、俺は実際にレインが人を殺したことを見たわけじゃないけど、本當だと思つてゐる。

「母さん、お客様が困つてゐるぞ」

「あら、私つたら、うちには女の子がないものだから嬉しくつて……！　今日はゆっくりして行つてね！」

後ろから親父が言つた。でも、母さんは一向に離す気配がなかつた。絶対にすぐに帰してもうえそうにはない。

母さんの用意した御馳走は度を超えていた。この量を一体誰が食べるんだ。

完全に一人だけ浮かれてる。いや、浮いてる。

こんなに喋る人だつたかつてくらい話していた。親父はたまに一言一言喋るくらいで変わった様子はなかつた。

だけど、そんな穏やかな空氣も長くは続かなかつた。

急にレインが立ち上がり、カーテンを引いた。そして、親父の腕を掴むと、部屋の奥、扉の方へと突き飛ばすように追いやつた。

「地下の部屋に隠れる」

低く鋭い声、俺は困惑した。すぐに親父に腕を掴まれ、混乱はひどくなる。

何も起きていない。なのに、何かが起きている。

「早くしろーー一家心中する氣か！？」

レインが声を荒らげるのを初めて聞いた気がした。その手には黒い物が握られていたように見えた。

親父は俺と母さんの腕を掴んで、引きずるように部屋を出た。

俺は扉の閉まる音と同時に窓ガラスが割れる音と銃声を聞いた気がしたけど、わからなかつた。

地下室にいる間、俺は情けないことに震えていた。親父は「大丈夫だ」って繰り返すだけでそれ以上は何も言ってくれなかつた。

母さんは何も知らないだろうに、ずっと俺を抱き締めてくれていった。凄く安心するのに、離れなきやいけない気がするのはいつだって兄貴のことがちらつくからだ。

何もわからないまま、どれだけの時間が経つたのかはわからなかつた。

地下室にやつてきたのはレインだけじゃなかつた。なぜかレオも一緒だつた。

レインは親父と母さんに暫くホテルに滞在するように言い、護衛にレオを付けるとも言つた。そして、親父は素直にそれを受け入れていた。

俺はレインと帰ることになつたけど、帰り道はずつと混乱していた。

帰り際見た時、ダイニングの窓は割れ、母さんのお気に入りのカーテンは裂かれて、御馳走は無残な姿になつてゐるのがわかつた。何があつたのかレインは言わなかつたし、何で地下室があることを知つてたのかもわからない。

家に帰つてからも小さな震えが治まらなくて俺は頭を搔き鬯つた。

「何だよ、何なんだよ……」

俺は繰り返す。わけがわからぬ。本当にわけがわからぬ。

「言つただろ？　お前は私が守る」

安心させようとでも言つのか、レインは言つた。だけど、安心で

かるはずがない。

「わけわかんねえよ！　お前は俺を殺しきたんじゃねえのかよ！？」

「　　」  
　　レインは俺に「お前を殺す」と叫んだ。なのに、守ると叫んだり、  
　　わけがわからない。

この問題は、今、はつきりさせなきゃいけない。

そう思つたけれど、レインに抱き締められて何も言えなくなつた。

「大丈夫だ、リオ。私がいる」

そう言つて、レインは俺の額にキスをした。まるでさうすること  
で俺の中の恐怖を拭い去ろうとするかのように。

そうして、俺は泣いた。わけもわからずに泣いた。

きっと、怖かつたんだと思つ。自分の知らないところで何かが変  
わり始めていて、俺はそれに巻き込まれているから。

あれから、レオは毎日律儀に連絡を入れてくれた。多分、レインの命令だらうけど。

母さんは少し混乱しているけれど、親父も無事らしい。

俺はレインと一緒に変わらない日々を送っている。もしかしたら、俺の知らないところで何がが変わり始めているのかかもしれないけど、ガツンと来るまではわからない。人生なんてそんなもんだ。神のみぞ知るつてこと。尤も、レインなんかを見ると神なんかいないつてのがよくわかる気がする。

そのレインはいつもなく険しい表情で銃の手入れをして、腰のホルスターに収めた。

こんなに物々しいのは初めてで、この前、撃つたのか聞きたくてもできなかつた。そんな雰囲気じやない。

だつて、本当は踏み込んでいけない世界が確かにそこにあるから。

レインはどうやらともなくナイフを取り出して、刀身を見詰めた。まるで鏡のような輝きの中に映る自分を見詰めてるのかもしれなかつた。

どれだけこいつは武装しているんだ。

それに、やっぱり手慣れている。

その目もまた刃に似ている気がした。

暗殺者をこんなにまじまじと見ることなんて中々あることじやないし、あっちゃん困るだらうけど、不思議な気分だつた。

いや、俺の中でレインは特別だけど、暗殺者じやない。

「レイン」

ずっと、ナイフを見ているレインに俺は問いかけてみた。聞きたいことは山ほどあるのに、相変わらず言葉にならなかつた。

「……妙なんだ」

「え?」

「何かがおかしい

ぽつりとレインが言つた。

レイン自身、困つてゐるような、迷つてゐるような、そんな感じで。

「……お前の他に親父を殺したい奴がいるってことか?」

必死にレインの言葉の意味を考えて、聞いかけた。

レインは親父を守つた。そういうことになつてゐる。

自分の獲物だから、自分の手で殺すために守つたのか。

真実はわからない。けれど、今もレインのパートナーのレオが親父と母さんを守つてゐる。

それもまたビジネスなのかは俺にはわからない。所詮、暗殺者の世界なんて一般人にはわからない。わからせてもらえないから。

「私は調べたいことがある。少し離れるが、必ず戻つてくるからな」  
俺の心なんて見透かしているだらうに、敢えて触れずに、ナイフをまたどこかにしまつてレインは立ち上がつた。

そうやつて、レインは容易く俺の追求から逃れられる。

俺だけが空回つてゐる。いつだつて。

「お前は安全だ。誰にも殺させない」  
言いたいのはそんなことじゃない。  
聞きたいのはそんなことじゃない。

なのに、レインは出て行つてしまつた。

俺の頭上に疑問の雨を降らせたまま。

彼女はやつぱり夕立に似ている。急に降り注いで、急に去つていく。俺の頭上に暗雲をもたらして、ゴロゴロと雷を鳴らす。  
いや、夕立つていうと何か格好いい感じがしてむかつくな。ビックちかつていうと、ゲリラ豪雨とかの方がしつくりくる。それくらいレインはいきなりで、ちょっと獵奇的。

そんなことは大して問題じゃないけれど。

\* \* \* \* \*

理央のマンションを出たレインは周辺に張っていた仲間からの目配せにうながりした。

レオには既に仕事を言い付けてある。それに、彼はこの仕事だけは引き受けられない気がした。

尤も、その仲間に頼むのも非常に不本意だったが、借りを返してもらう時期でもあったのだ。きっと、今でなければ一生返してもらうことはない。

そして、自分でも危険がないか慎重に探りながら、レインは情報が得られそうな場所を目指した。

街は忙しない。一人の少年が運命を翻弄されていることなど知りもしない。

喧噪は平和だ。きっと、墮落の臭いに紛れて、硝煙に臭いにも血の臭いにも気付かることはない。

だけど、その腐敗臭の中の微かな獣の臭いに気付く、同じ種類の獣がいる。同じ匂いの染み付いた獰猛な者が。

「よお、『雨女』」

友にでも接するような気安さでその男は声を掛けてきた。  
年上はレインよりも少し上、セミロングの漆黒の髪を跳ねさせ、ファーのついたレザージャケットを纏ったワイルドな印象の男、獣の皮を被つた獣……

「そう呼ぶのはやめる、不愉快だ。『ブラック・パンサー黒豹』」

レインは“黒豹”を睨む。

殺氣を見せない。けれど、この男がいつでも自分を殺せることを

レインは知っていた。それはレインにとつても同じことだからだ。プロとして、見境のない素人のような真似はしない。どちらにもプライドがある。

「じゃあ、今度から“アメフラシ”にしてやるつか」  
彼はあるで自分が有利であるかのように笑う。余裕と確信があるからこそ、いつだってこうして自ら絡んでくるのだ。

「言い間違えた。お前の存在が不愉快だ。消えろ、クロサキ」「ヒヨーゴでいって言つたのに、相変わらずお堅いね」

“黒豹”ことクロサキ 黒崎兵吾くろさきひょうごはレインと同じく暗殺者だが、属する組織が違う。協力関係にあるわけでもなく、場合によつては殺し合いも有り得る。そういう危うい関係を彼は楽しんでいる。

「お前は今回の件、どう見てるんだ？」

路地裏に移動して黒崎は問う。

レインは彼が知っていることに驚きはしない。先日、巽邸を襲撃したのが彼と同じ組織の人間だということはわかっているからだ。「私は任務を遂行するだけだ」

答える義務はない。情報を共有する必要などないのだ。

「いいことを教えてやるよ」

誘惑するように黒崎は言つ。

レインが「必要ない」と即座に返せば、彼は「そう言つなよ」と大仰に肩を竦めて笑つた。

この男の全てはわざとらしい。

「お前の利益はどうなる?」

自分の組織の情報を漏らせば、彼には不利益があるはずだった。

しかし、黒崎は尚も「心配ありがとうよ」と笑い続けた。

「でもな、俺はこんな不毛なことでお前と殺し合ひはしたくねえんだ」

黒崎はあるで友を失いたくないとでも言いたげだった。

だれ、レインは心を痛めているかのような口振りに惑わされるつ

もりはなかつた。

乗せられているは明白だつたが、レインはそれよりもその先にあるもののが気になつてしまつた。

「どうしたことだ？」

「よし、興味を持つたな？」

ニヤリと黒崎が笑えれば、レインは一瞬後悔もしたが、すぐに同じようにニヤリと笑つてみせた。

「それはやつとお前を殺す理由ができるとこりうことだら？」

殺し合いがしたくないと言うならば、今度こそ殺し合いに発展する事態が待つてゐるということになる。

面倒臭い人間は少ない方がいい。レインは黒崎のようになジヤンキ一じみて、スリルを好んだりはしない。何事も程々がいいのだ。

「つたく、殺し合いが好きなんて、どうかしてるぜ。こんないい男を前に裏切りの一つや二つ、考えてみたらどうだ？」

「言つただろ？ クロサキ、お前は不愉快だ。非常にな」

黒崎は軽薄な男だ。対立する組織の暗殺者にちょっとかいをかけたり口説いたり、それでいて底が見えないからこそ不愉快なのだ。

「お前の護衛対象だが……幸せにはなれねえぜ。どの道、誰かは死ぬだらうよ」

物事の裏の裏まで嗅ぎ付けるのはやはり獣のようだ。黒崎のそういうところをレインは苦手としていた。

それは単なる冗談ではないのだ。レインもまた感じていることだつた。

「お前のところと私のところで動いているんだから仕方ないだろ」「二つの組織が動いている現状で、物事が平和に解決することはありえない。

「まさか、偶然だなんて思つちゃいねえだらうな？」

異央は悪人ではない。しかし、人間どこで恨みを買うかわからないものだ。

だが、この状況は何かがおかしい。裏で何かが起きているとレイ

ンも感じていた。

「不愉快極まりねえ話だ。お前と被るなんてよ」

言葉を返すように黒崎は言つ。

だが、両雄は並び立たない。このまま裏社会のトップ組織であるレインの組織と黒崎の組織が共に存在し続けることはまずありえない。

「お前を殺せば済むだけだ」

遅かれ早かれ殺し合わなければなくなるだろうとレインは感じている。潰し合いに応じる気配が組織にはあるからだ。

「なあ、本当の依頼はどうちだらうな？」

「本当の依頼、か。どちらかがダミーで、私たちを衝突させたいとでも？」

核心に迫るような黒崎の言葉。だが、レインは自分の心を見せるつもりはない。あくまで好戦的に構えていた。

「わかつてんんだろ？ お前の依頼主」

痺れを切らしたように黒崎は言つが、レインは「私たちはただ遂行するだけだ」と頑なな態度を取る。

どうであろうとレインにとって、この男は面倒なライバルでしかない。

この男の誘惑に負けたら何もかも失つてしまつ。

抗うことだけが、最良のコミュニケーションであり、護身術だと氣付いたのはいつだつたか。

「お前ならわかってると思つてたよ。わかつてて、踊つてるつて」「買いかぶり過ぎだ」

「お前のことならわかる」

当てこすりの関係、ギリギリのスリル、或いは恐れているのかもしない。彼のサディスクな本性を。

「何かあつたら言え、協力してやる」

ニツと黒崎は笑い、レインは溜め息を吐きたくなつた。

協力などありえない間柄なのだ。損はあっても、得はない。

味方なら心強い言葉だが、敵に言われても信用できない。この男の場合、罠であることも明白だ。

「お前がそんなに死にたがりだとは知らなかつた」

レインは呆れてみせた。段々、黒崎のちょっとかいがエスカレートしていることはわかつていたが、気に入られて嬉しいタイプではない。

だが、今日の黒崎は何かが違つた。それも作戦なのか、眉を顰める様子はいつもとは違う。

「気に食わねえんだよ。あいつらの思い通りになりたくねえ。お前もそつだろ？ 大体、こいつちだつて、本氣で動いちゃいねえし」

黒崎はよく喋るが、不用意に喋るような男ではない。しかし、今田は自分の組織を自棄になつて垂れ流しているようにも見える。けれど、レインは何があつてもこの男だけは信用するつもりはなかつた。

「まつたく、お喋りな男だな。そんなに喋りたいのなら、ダムを決壊させるきっかけを作つてやるつか？」

ホルスターから何度もなく彼に向けてきた愛銃を抜き、銃口を膝に向ける。

それはこれ以上、付き合いつもりはないといつ意思を表していたが、無駄だった。

「俺はゲロしねえよ。愛の言葉なら声が嗄れるまで叫んでやつてもいいが……それとも、案外純情なお前が耐え切れないほど卑猥な言葉を吐き続けてやろうか？」

この男は素人ではない。どんな拷問にも屈しないだらつとレインは思つている。それこそ、言う通りのことを実際にやりかねない。「異理央、あいつに惚れてるんだり？」

「そんなんじやない」

「まあ、いいんじやねえの？ あの猛獸が許してくれねえと思つけど」

まるで、学生のようなやりとりだが、普通の恋などまざありえない

い。

「お前は本当に不愉快な男だ」

本当は最初から何もかも知っているから不愉快なのだ。

「お前がいつまでも強がってくれちゃうから、つい可愛がりたくな  
るんだよ」

それはいつも女に見せる笑みだろうか。何となくレインは考えて  
しまった。そして、容易く獲物を手に入れて、壊してきたのだろ  
う。

「この男は笑顔で獲物を虜めるような男なのだから。

殺し合いで好きなのはお前の方じゃないのか？」

この男とこうして話すのはこれが最後なのかもしぬないと思いま  
がら、レインは問い合わせてみた。

無駄なことだと悟っていた。けれど、気の利いた別れの言葉  
が浮かぶはずもない。

「まだまだお前とは遊びの関係でいたいんだよ。お前がいるって思  
うだけで俺はかなり興奮できるからな」

勢いに任せて、危険な遊びに身を投じる若者のような無謀さがま  
だ彼の中にあるかもしれない。麻痺する感覚の中で、それだけが  
鋭い痛みを与えてくれる。

いつだって、黒崎には陰りを感じていた。裏社会に身を投じると  
いう者の空氣というわけではなく、暗黒面というには少し語弊があ  
る。

今なら、それが少し理解できる気がするとレインは思った。今な  
ら、その違和感の名がわかる。  
レインが今正に感じているものだからだ。

\* \* \* \* \*

俺を置き去りにしたレインが帰ってきたのは夕方だった。

その手には食欲をそそる臭いを部屋に充満させるビニール袋、駅

前のタコ焼き屋のものだ。

そして、同じく駅前のシュークリーム屋の紙袋もある。おやつのつもりなのか。

「土産だ、食え」

「あ、ああ……さんきゅ」

別に頼んじやしないし、聞きたいのはそんなことじゃない。けれど、その誘惑には勝てなかつた。

おやつってこういった可愛いや量じゃなかつたけど。

レインと飯を吃るのは初めてじゃないのに今日は妙に緊張した。

「調べものは済んだのか？」

話題を探そうとしてもみづからなくて、一番聞こいやまずここと

を聞いてしまつた。

「……本当にこんなのは初めてだ」

レインは少し顔を顰めてから言つた。

「一体、何があつたのか。」

問い合わせてもレインは絶対に言わないと黙つけど。

「まさか、御家騒動……いや、そんな上等なものじゃないか。ただのくだらない喧嘩に巻き込まれるなんてな」

何のことか、俺にはわからなかつた。わかるはずもない。きっと

レインは俺にわかるように話してはくれないから。

「飯時にする話じゃなかつたな。だが、安心しろ。もうすぐ終わるから、何もかも平和にな」

もうこの話題はやめにしようと思つた。

俺は当事者なのに、蚊帳の外。流されているしかないんだから。

終わりが不穏なものにしか思えなくても、それでも……

夢を見た。レインがいなくなる夢、いや、違う。レインが現れる前に戻る夢、レインがいなかつたことになる、ただそれだけなのに怖くて仕方がなかつた。

いつから、こんなに臆病になつたのかは知らない。

でも、怖いと思うのはあの人を傷付けた時以来かもしれない。

俺はこれまでに恨まれても仕方がないことをしてきた。遊びに身

を投じて、容易く人を傷付けてきた。遊びはもうやめた。

今はレイン以上に価値のあるものを知らないと言える。

レインは俺のせいで傷付いたりしない。だから、安心するのかも

しれない。

だから、その安定剤を失つてしまつのはとてもなく、怖い。

そうなるくらいなら、レインの手で殺された方がずっといい。

飛び起きて、顔を洗つて、リビングに駆け込めば、レインが笑つた。

「何だ、リオ。怖い夢でも見ておねしょでもしたか？」

いつもと同じだと思った。でも、違う。テーブルの上に置かれた朝食、レインは身支度が済んでる感じで足元には荷物、ソファーの上に折り畳まれた俺が買わされた服。

まるで、出て行こうとしているみたいただ。

「レイン」

何のつもりなのか。

聞きたいのに言葉が出てこない。

唇が震えて、本能的に聞いちゃいけないことをわかつてゐるみたいに。

「もう戻れない。」これで、サヨナラだ

レインは気が付いてしまつたなら仕方がないと言つたようだつた。

「何だよ……それ。わけわからんねえよ……」

こいつはいつも突然だ。わけわからんねえことばかり。

考えてみれば短い期間だったのに、ずっと振り回されていた気が

する。

「だらうな」

「許さねえ、絶対に許さねえ……こんな終わり方があつてたまるかよー。」

あつさりと言われて、俺は頭に血が上るのを感じた。

守ると言つたところは嘘だつたのか。

レインがゆっくり近付いてくる。始まりのあの日みたいに俺は動けなくなる。

「許さなくていいさ。とつぐに私は許されない存在だ」

罪人のようにレインは言う。普通の女の子みたいなのに、暗殺者。犯罪者と一緒にいた俺はストックホルム・シンドロームになつたとでも言われるのか。

背中がカーペットに押し付けられて、押し倒されたことに気付いた。

人形のような顔には見慣れたはずなのに、やつぱりドキッとする。そして、触れたか触れないかわからないような、そんなキス。それだけで魂を抜かれた気分になつて、気付いた時にはレインは部屋を出でていた。

起き上がりなくて、呼び止められなくて、サヨナラのキスは胸に痛かった。

それから暫く俺は泣いた。何も考えずに泣いた。誰も見てない、誰も聞いていない。苦しくて、悲しくて、悔しくて、自分が男だつてことも忘れるぐらい、子供みたいに泣いた。

けれど、レインは戻つてこない。俺を慰めてはくれない。レインの私物は何一つ残されてなくて、夢が現実になつたと思った。でも、違うのは、なかつたことにはできないってこと。

最後の晩餐は駅前のタコ焼きと焼きそばとシュークリームとプリン。最初のピザの方がましだったと思う。

冷め切つた朝食の味は涙に紛れてわからなかつた。

レインは卑怯だ。確實に俺を殺した。俺の心を殺して、置き去り

にした。

サヨナラのキスが俺にトドメを刺した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7249y/>

---

アンリアル

2011年11月24日11時51分発行